

2017年11月12日(日)朝10:10
11月第2聖餐共同主日礼拝式説教

主の降誕前第7、大掃除等
日本アライアンス庄原基督教会

説教題：天上の讚美

聖書:ヨハネの黙示録 19章1～5節

＜口語訳＞

新約聖書405頁

ヨハネの黙示録 19章1～5節

＜新共同訳＞

新約聖書475頁

ヨハネの黙示録 19章1～5節

＜新改訳第3版＞

新約聖書497～498頁

ヨハネの黙示録19章1～5節

＜塚本訳＞

新約聖書816～817頁

主題:主イエス様から賜った聖霊の導き

によって主の弟子たちは、主の名による
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、
私たちも、福音を伝えたい。

序論；

- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」とありますように、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通して(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録されたものと理解されています。
- ◇ヨハネ黙示録1章は、御子の再臨信仰と愛、2章～3章は、7つの教会への手紙、4～5章は、羔羊礼拝と大讚美、6～13章は、聖徒の戦い、天使と龍(悪魔・サタン)、獣との戦い、14章は、小羊への大讚美、神無視の人々への裁きと信仰者への忍耐の求め、15章は、金の怒りの鉢による神の裁き序曲、16章は、金の鉢の用意命令、腫物、血海、血水、太陽炎焼、獣の座の暗黒による裁き、ハルマゲドンでの龍(悪魔・サタン)と獣等と主なる神との決戦、バビロン滅亡預言で、17章は、大淫婦と権力者の癒着、その奥義、自滅と仔羊の勝利、18章は、バビロンの滅亡宣言と哀歌です。
- ◇ヨハネ黙示録19章1～5節は、天上の大群衆讚美・長老らの礼拝、天上の声です。

本論；

◇本日、ヨハネ黙示録第19章1～5節から主の使信に思い・心をとめます。

◆黙示録19章1～5節；ヨハネは、大群衆の天上での讚美・長老らの礼拝を見、かつ、讚美、礼拝を命じる天の声を聴きます。

◇19：1～5；塚本訳◆バビロンの刑罰に対する天上のハレルヤ

- 「1 この後私は多くの群衆の大声のようなものを天に聞いた、曰く、ハレルヤ！ 救いと栄光と権能とは我らの神のものである。
- 2 その審判は真実にして義しく、彼は淫行によって地(の人々)を滅ぼした大淫婦を審き、彼の(忠実な)僕達の(流した)血を彼女の手で復讐し給うたからである。
- 3 再び彼らは(繰り返して)言うた、「ハレルヤ！ 彼女の(焼かるる)煙は永遠より永遠に立ち上る(であろう)。」
- 4 すると二十四人の長老と四つの活物とが平伏し、玉座に坐し給う神を拜んで言うた、「アーメン、ハレルヤ！」
- 5 すると玉座から(一つの)声が出て言うた—

—(汝ら)凡て神の僕達、神を懼るる者達、小なる者も大なる者も(皆)我らの神を讚美せよ！」と、ヨハネは、天使の大群衆の讚美、24人の長老と4つの生き物らの礼拝を見せられ、天上からの讚美命令の声を聴きました。

◇1～3節；ヨハネは、「天上の大群衆の讚美」を聴いたのです。

⇒「大群衆の讚美」は、「大バビロン・大淫婦・大なる都・大きな碾臼」の「滅亡」を受けて、「主の救い、栄光、その力」を称えるものでした。

⇒「大バビロンを裁かれる神は正しい」と告白し、「不品行と地を汚した大淫婦」が裁かれたと、大淫婦の罪への主の血の報復を告白しています。

⇒血の報復は、天上のある殉教者の訴え祈りでもありましたので、「主」は、「殉教者らの祈り」に応じて下さったものでもありました。

⇒「神の御国の真の平和」、ヨハネの黙示録21章の新天新地において完成します！

⇒この最後の「大バビロン・大淫婦・大なる都・大きな碾臼」の「滅亡」は、大きな転換点です。

◇4節 ; 「24人の長老らと4つの生き物」は、「大群衆の讚美」を聴いて、「御座に着かれる主の前にひれ伏し」、「ハレルヤ」と、「讚美の大合唱」に、「応答」しました。

⇒「大バビロン・大淫婦の繁栄」は、「悪行、癒着、奢侈」であり、これに与った「楽器演奏者、細工人、碾臼を引く者、燈火」は喪失し、「サタンの繁栄文化・企業社会」は崩壊、利益優先で生きてきた人々を嘆きのどん底に叩き落とす姿を見せられました。

⇒「大帝国ローマ・バビロンの繁栄・人間の利益優先社会」が、失った讚美の豊かさを迫害という悪行に苦しんだ大群衆に明け渡した時でも、ありました。自分たちの権力、権勢によらず、主の力と栄光にお頼りした祈りの結果でした。

◇5節 ; 「天上の讚美命令の声」は、「大群衆の讚美の心が不足していた」からではなく、「天使ら」が、「神のしもべら、小さき者も大きい者もへだてなく、神を畏れかしこむ者」と、高く評価して、大讚美に呼応しているのです。

⇒彼等には、主への讚美の心があるのです。

◆ヨハネ10章7～18節;ヨハネは、羊飼いなる主を思い起こして、神の愛の養いと導きについて語っています。

◇ヨハネ10:7～18節 塚本訳;

◆羊の門<10:7～10>

- 7 そこでイエスはまた話された、「アーメン、アーメン、わたしは言う、わたしが羊への門である。(羊飼はわたしを通らずに、羊に近づくことはできない。)
- 8 (わたしより)前に来た者は皆(羊飼でなく、)泥坊であり、強盗である。羊は彼らの言うことを聞かなかった。
- 9 (また、)わたしが(羊の出入りするための)門である。わたしを通って入る者(羊)は救われる。(いつもこの門を)入ったり出たりして、牧草を得るであろう。
- 10 泥棒が来るのは、ただ(羊を)盗み、殺し、滅ぼすだけのためである。わたしは(羊に)命を持たせるため、あり余るほど(の命を)持たせるために来たのである。

◆良い羊飼 <10:11~21>

- 11 わたしが良い羊飼である。良い羊飼は羊のために命を捨てる。
- 12 (本当の)羊飼でない雇人(である羊飼)は、羊が自分のものでないので、狼が来るのを見ると、羊をすてて逃げる。・・すると狼は羊を奪い、また追いつくのである。・・
- 13 雇人であって、羊のことなどどうでもよいからである。
- 14 わたしが良い羊飼である。わたしはわたしの羊を知っており、わたしの羊もわたしを知っている。
- 15 父上がわたしを知っておられ、わたしが父上を知っているのと同じである。そしてわたしは羊のために命を捨てる。
- 16 ・・なおわたしには、この檻のものでない、ほかの羊がある。(彼らはまだ野山をさまよっている。)わたしはそれをも導いてやらねばならない。彼らはわたしの声を聞き分け、かくて群一つ、羊飼一人となるであろう。・・
- 17 だから父上はわたしを愛してくださる。(羊のために)命を捨てるからである。しかしわたし

が捨てるのは、(まことの命として)ふたたび取るためである。

18 だれもわたしから(力づくで)命を取り上げることはできない。わたしが自分で(自由に)捨てるのである。わたしにはこれを捨てる権利があり、ふたたびこれを取る権利がある。(命を捨て、また取る)この命令を、わたしは父上から受けた。」と、ヨハネは、主が弟子たちに語られたみことばを丁寧語に語っています。

◇ 10:7～10節 ;ヨハネは、先ず、「主」が、ご自身を「羊の門」と語り、「この門」から入るものを**主の羊**として受け入れ、「**主の門**」を通過して入らなかったものを**盗人、強盗**と表現、「**盗人、強盗の目的**」を「**主の羊を盗み、殺し、滅ぼす**」(10)ことと説明なさったと、「**記録した**」のです。「**羊の門**」である**主**は、**主の羊**がいのちを得るとも、語って下さったと言います。⇒「**羊の門**」は、機能的な存在ではなく、「**主の羊**」にとって、「**盗人、強盗**」からそのいのちを守って下さる人格的存在であることを暗に示しておられるのです。

◇ 11～18節 ; 「わたしが良い羊飼である。良い羊飼は羊のために命を捨てる」(11)、「わたしが良い羊飼である。わたしはわたしの羊を知っており、わたしの羊もわたしを知っている」(14)、「父上がわたしを知っておられ、わたしが父上を知っているのと同じである。そしてわたしは羊のために命を捨てる」(15)、「父上はわたしを愛してくださる。(羊のために)命を捨てるからである。しかしわたしが捨てるのは、(まことの命として)ふたたび取るためである」(17)、「わたしが自分で(自由に)捨てるのである。わたしにはこれを捨てる権利があり、ふたたびこれを取る権利がある」(18)と、語られ、「良い羊飼」であられる主は、「(羊のために)命を捨てる」と仰せになったのです。

⇒「**良い羊飼**」の大事な任務は、「**自分の羊**」を「**盗人、強盗**」から守ることで、「**盗人、強盗**」は、**ヨハネの黙示録**で見た通り、凶暴で、知恵者なので、罪人は対抗できないのです。

⇒主は、罪人として**十字架の死**を背負い、「**盗人、強盗**」の**要求**を満たされたのです。

- ⇒その理由を主は、「**わたしが 自分で(自由に)捨てるのである。わたしにはこれを捨てる権利があり、ふたたびこれを取る権利がある**」(18)と、語って、その「**権利**」で、「**盗人、強盗**」を無力な者にして下さったのです。
- ⇒ヨハネの黙示録の「**大バビロン・大淫婦の滅亡**」は、「**盗人、強盗**」を「**羊の門**」の外に置き、狼の餌食してしまう当時の現実と同じことを、主は語っておられるのです。
- ⇒ヨハネ**16:33**の通り、この世では、「**盗人、強盗**」が、「**地上を支配する権利**」を主張し、「**苦しみ**」を背負わせています。最初の人、アダムとエバを誘惑した悪魔が与えた苦しみは、肉体の死の門であり、心では、自己中心の心の支配による孤独への追い込みです。
- ⇒主日の礼拝、日々の個人礼拝を通して、この「**盗人、強盗**」の強さを知り、「**主の羊として門**」の中に留まりましょう。そこには、**主のみことばの牧草**が用意されています。
- ⇒**神礼拝**以外のところには、「**神の与える牧草**」は、見いだせないのです。「**天上の大群衆の大讚美**」は、**神の牧草の恵み**です。

結論；

- ◇神は、変わらない愛と思いやりの神です。
- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」で、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通し(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録と理解。
- ◇ヨハネ黙示録1章は、御子の再臨信仰と愛、2章～3章は、7つの教会への手紙、4～5章は、羔羊礼拝と大讚美、6～13章は、聖徒の戦い、天使と龍(悪魔・サタン)、獣との戦い、14章は、小羊への大讚美、神無視の人々への裁きと信仰者への忍耐の求め、15章は、金の怒りの鉢による神の裁き序曲、16章は、金の鉢の用意命令、腫物、血海、血水、太陽炎焼、獣の座の暗黒による裁き、ハルマゲドンでの龍(悪魔・サタン)と獣等と主なる神との決戦、バビロン滅亡預言で、17章は、大淫婦と権力者の癒着、その奥義、自滅と仔羊の勝利、18章は、バビロンの滅亡宣言と哀歌です。
- ◇ヨハネ黙示録19章1～5節は、天上の大群衆讚美・長老らの礼拝、天上の声です。

- ⇒ヨハネの黙示録19:1～5は、「大バビロン・大淫婦」滅亡を知った天上の大群衆の讚美、24人の長老・4つの生き物の礼拝、讚美、天上の天使の讚美の呼び掛けです。
- ⇒この「讚美する大群衆」の多くは、「殉教者」で、主に血の報復を求めた人々です。
- ⇒異邦人であった私たちは、最初から「盗人、強盗」に直接いのちを狙われない「主の門」の中に置かれています。「天上の大群衆の報復を喜ぶ大讚美」に呼応するだけでなく、「神の恵みの豊かさ」を思い起こす大讚美をささげさせていただきたいと願います。